

## 映画「花岡悲歌」に向けて

佐々木 健

私が秋田県での 1945 年に起こった「花岡暴動」に興味を持ったのは、約 4 年前になります。私は、1986 年から 87 年にかけて、東アジア反日武装戦線「さそり」のメンバーで獄中にいて無期懲役の求刑を受けていた黒川芳正氏が「自分たちの母親のドキュメンタリー映画を作りたい」という思いを受けて、東アジア反日武装戦線の「母たち」という 8 ミリ映画を制作しました。4 年前にこの映画を DVD 化しようと思い、もう一度彼らは何故このような事件を起こしたのかを調べている時、「さそり」のメンバーが鹿島建設の資材置き場を爆破した事件を「花岡作戦」と呼んでいたのに気づき、「花岡事件」のことを調べ始めました。すると出身が秋田県である私がこの事件のことを全く知らなかった事を知らされたと同時に、東アジア反日武装戦線の裁判に携わった新美隆弁護士と内田雅敏弁護士が、最高裁判決の後、「花岡事件」の被害者&遺族対鹿島建設との交渉に携わり、裁判、和解に至るまで関わっていた事を知り、正直自分がそのことを知らなかった事を迂闊だったと思いました。

そこから現地花岡を訪れたり、書籍を探し出して読み進めるうちに「中国人強制連行」がなぜ行われたのだろうという疑問を持ち、日本人が持つメンタリティが関わっているのではないかと思えてきて、今も続く韓国、朝鮮人や中国人に対するヘイトクライムの根源にアジア人蔑視があるのではと思うようになりました。

中国への侵略戦争、それへの企業の協力と現地労働者への強制労働と搾取。そこから得た莫大な利益。また天皇を頂点とした軍部の暴力的支配が多くの現地住民を死に追いやった。

戦後も、企業は中国人を使役したことで損害を受けたとして国から国家補償金を受け取り、戦後の自社の発展の基礎とした。また GHQ は戦後の日本を取り込むために、天皇制を残すとともに、企業の戦争犯罪に目を瞑り、戦犯までも釈放するという形で、ある意味で今の日本を支配下に置いたとも言えます。

自分に何ができるのだろうかと考えた時、今に至るこのような加害の歴史を映像記録に残そうと思い既に4年が過ぎましたが、なかなか構想がまとまらずにいます。

2年前から、私が運営している東京国立市のスペース「キノ・キューッへ」で「花岡の心を語り継ぐ」というイベントを始めました。タイトルは、2021年に「かもがわ出版」より発行された、池田香代子さんの「花岡の心を受け継ぐ」からいただき、中国人強制連行の歴史と今を考えるために1回目は花岡平和委員会の石田寛さん、2回目は旅日華僑中日交流促進会の林伯耀さん、3回目の今年5/26は、「花岡和解、広島・安野和解」に関わった内田雅敏弁護士と、3回共に池田香代子さんを迎え対談していただきました。

今年は、「和解」の話が中心になるので、内田弁護士が「和解」を担った広島・安野を訪ねようと思い、資料を取り寄せているうちに、「広島安野・中国人被害者を追悼し歴史事実を継承する会」の川原洋子さんを知り、インタビューと安野発電所現地を案内していただきました。1992年より中国現地を訪れ、生存者や遺族を探し出し、当時の様子や残された遺族の話を書くという途方もない作業を長年続けてこられたのには、全く頭が下がる思いですが、その長い経過の上に「西松・安野裁判」での連行と虐待の事実を認めさせることができた高裁勝訴、最高裁では敗訴しましたが、付言によって和解に導いた長い活動があったのです。そこから得られるものは、内田弁護士のいう、「このような歴史問題は、裁判での決着ではなく、和解することが重要なのだ」ということにあり、またそれ以降継続する追悼事業が、民間による日中友好を促進するということなのだと思います。

今回の川原洋子さんの協力によって新たに中国人強制連行に関する一側面が見えてきましたが、国の謝罪や他の企業からの謝罪という諸問題もいまだに残っています。まだまだやるべきことは尽きないと思いながら戦後80年になる来年までには、「花岡事件の映画」を完成させたいと思っています。